

医療思想の貧困

古代中国には、渤海ぼっかいに仙人の住まう三神山があった、この仙境には「長生不老ちやうせいふくろう」の靈薬があったらしい。このことを臣下の徐福じよふくが秦の始皇帝に伝えたとところならばそれを取りに行つてこい、と命じられたという。『史記』にそう記されている。現代人であれば、長生不老の靈薬など存在するはずがないと考えるであろうが、それでもアンチエイジングという医療分野があり、抗加齢ドックを導入している総合病院があり、日本抗加齢医学会なる研究者の組織まである。この学会のウェブサイトを開いてみると、抗加齢医学とは「加齢という生物学的プロセスに介入を行い、加齢に伴う動脈硬化や、がんのような加齢関連疾患の発症確率を下げ、健康長寿をめざす医学である」とある。加えて「老化の兆候といった弱点をみつめて、早い時期から徹底的に対処する事が重要」だともいう。

日本人の平均寿命は、男性も女性も世界第二位だといふのに、それに高齢者の末期まつごの苦しみ、介護、看取りに際しての家族の心身の困憊こんばいに医療がどう対

渡辺利夫わたべりゆう (拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て二〇一五年十二月より現職。

応するかが、超高齢社会の重要課題であるのに、である。需要があつて供給があるのだから、これも日本人の空しい長命願望の表れなのか。困つたことに、抗加齢医学会の方針を厚生労働省が医療保険機関に義務付け、これを「相談型医療」から「介入型医療」への転換だと自負しているらしい。人間の成熟を妨げるまことに貧困な思想の振り撒きに等しい。健康や長命を追求すればするほど、人間はこの觀念じゆんに呪縛じゆばくされて授けられた生をまっとうできなくなる。健康や長命というものは、これを追求すればするほど、死の觀念が人間を捉えてしまふのである。この人生の背理に気づかなければ、と私は思う。

生活習慣病とかメタボリックシンドロームとかアンチエイジングとかいった用語法のなかに、日本人が追い求めつくり出した現代医療の危うい觀念じゆんが透けてみえる。人生は「お勤め」、死は「お迎え」だと私の母は生前よくいつていたものだが、人間の本当の成熟とは、つまりはそういうことだと、私はつくづく考える。